第５学年社会科の実践

１．単元名　「食料生産を支える人々」

２．単元目標

・　水産業がさかんな地域について調べ，その地域の特色や人々の工夫や努力，悩みをとらえることができるようにする。

・　水産業が加工や運輸などの仕事と密接にかかわり，水産資源や環境を守りながら漁業を進めていることに気づくことができるようにする。

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
日本の水産業について意欲的に調べ，自分たちの食生活を支えている水産業が今後どのようになっていくとよいのか考えようとしている。	水産業に携わる人々の工夫や努力，水産業と加工や運輸などの仕事とのかかわり，自然環境を守るための取り組みについて考え，適切に表現している。	水産業に関する資料や地図，統計などの資料を目的に合わせて，収集・選択し，的確に読み取っている。	日本の水産業がさかんな地域の様子や，日本の水産業の現状と課題を理解している。

３．ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

水産業が子どもたちにとって遠い存在であると考え，本単元では家庭でも気軽に食べにいくことができる，お寿司を取り上げた。また，「魚は釣る，網でとる」などのおおまかなイメージしかもてていない児童のために、実際に見学をしたり，漁業に携わる人の話を直接うかがったりすることができるように機会を設けた。さらに，写真や映像などの資料を効果的に使用し，魚の習性を利用して漁をしていることや魚の種類によって漁法が異なることなどの漁業に携わる人の工夫や努力に迫っていった。

本単元では，水産業に携わる人々の工夫や努力，水産業が加工や運輸など様々な仕事とかかわり合っていることに気づかせるだけでなく，日本の水産業の現状や課題について理解することも大きなねらいの一つである。とる漁業に従事する人々，育てる漁業に従事する人々，海の資源のために自然を守ろうとする人々と，水産業に携わる様々な人々の思いや願いに迫り，今後の日本の水産業のあり方について考えていけるようにした。また，水産業と自然環境とのつながりについて考え，環境を守っていくことの大切さや自分たちにはどのようなことができるのかを考えていく態度を育てるように指導した。

①学習形態について

水産業の概要を調べる段階では、一人ひとりのこだわりを調べる時間を保証した。さらに、生まれた課題については、一人ひとりが根拠をはっきりさせて自分の考えを持てるようにした。また、話し合いでは、グループでの話し合いを行うことで、一人ひとりが十分に自分の考えを伝え、さらに考えを深められるようにした。グループでの話し合いは、ホワイトボードにまとめていくことで、自分たちで話し合ってきたことを残せるようにした。

②ひびき合いについて

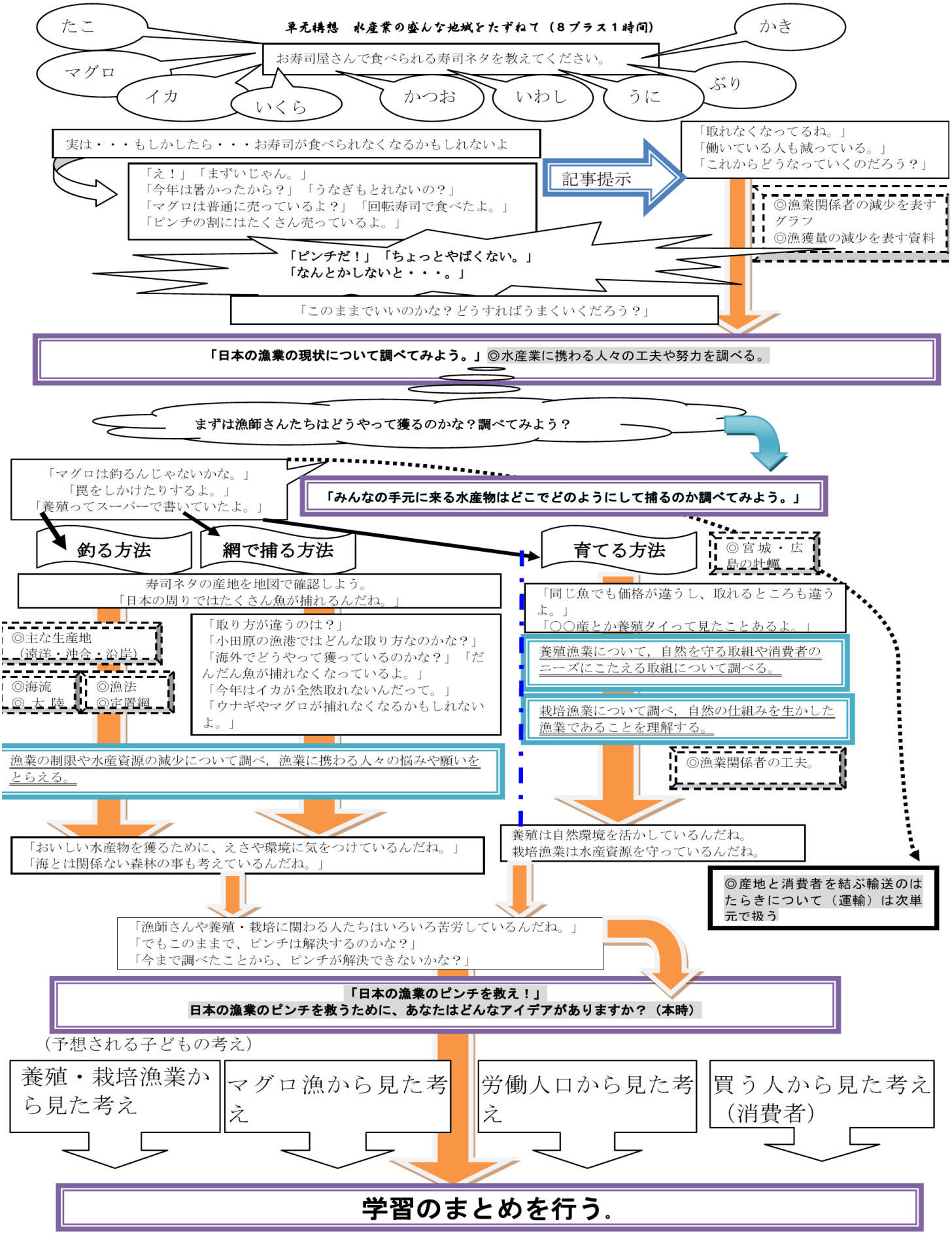
本単元でひびき合う姿は単元を通して徐々に膨らんでいくものだと考えた。なぜなら、漁業に関して日常的に関心の薄かった子どもたちが知的好奇心を持続させて学習することから、ひびきあいが継続し、「ひびき合う場面」が生まれてくると考えたからだ。順番としては、最初は「魚が捕れなくなったら・・？」という漠然とした疑問から「知りたい」という欲望をもち、自分の調べたこと以外の情報を友だちから得て、新たな気づきや疑問を持つことができる。そして「どうしたらよいか」を予想したり解決したりすることで、「将来どのようにしたら、魚が食べ続けられるか。」というようにこれからの漁業を考える場面がでてくると考えた。

４，単元と指導について

本単元は水産業が盛んな地域について調べ，日本の水産業の特色や自分たちの生活とのかかわりを理解するとともに，水産業に従事する人々の工夫や努力に気付き，水産資源の確保に重要な役割を果たしていることを考えるようにすることをねらいとしている。日本は周囲が海に囲まれており，水産業は重要な産業である。また，日本人は他の国に比べて魚を多く食べており，子どもたちも食卓にのる魚の名前は知っている。しかし，その生息地や捕り方，どのような人が関わっているのかについてまではよくわかっていない。そのため、水産業の学習が子どもたちにとって身近なものと感じられるように学習を進めていった。水産業は，食料資源の確保や自然環境のかかわりなどの観点から様々な問題を抱えている。例えば，２００海里規制による漁場の制限や捕りすぎによる水産資源の減少などがある。また，労働条件や労働環境の厳しさ，危険性，将来性や雇用の不安などの理由から，漁業で働く人が減少している。さらに，日本の水産物の消費量・輸入量はともに世界一となっており，その動向は世界に大きな影響を与えている。

こうした様々な問題を抱える中，環境や資源の保護を考えた「守り育てる漁業」が行われるようになってきている。人々が食料を安心して食べられるように，色々な取り組みが行われていることについても学んでいけると考える。また，水産業についての写真やグラフを通して，わが国の水産業の意味や自然環境とのバランスについて考えることができる教材でもある。こうした写真やグラフから問題を発見する力は，次学年からの歴史学習においても必要とされると考える。本単元の学習を通して，簡単に手に入れることができなくなってきた食料を確保するために，様々な人が努力していることに気づかせたい

５．単元構想


単元構想　水産業の盛んな地域をたずねて（８プラス１時間）
お寿司屋さんで食べられる寿司ネタを教えてください。
たこ
マグロ
イカ
いくら
かつお
いわし
うに
ぶり
かき
実は・・・もしかしたら・・・お寿司が食べられなくなるかもしれないよ
「え！」「まずいじゃん。」
「今年は暑かったから？」「うなぎもとれないの？」
「マグロは普通に売っているよ？」「回転寿司で食べたよ。」
「ピンチの割にはたくさん売っているよ。」
「ピンチだ！」「ちょっとやばくない。」
「なんとかしないと・・・。」
「このままでいいのかな？どうすればうまくいくだろう？」
記事提示
「取れなくなってるね。」
「働いている人も減っている。」
「これからどうなっていくのだろう？」
◎漁業関係者の減少を表すグラフ
◎漁獲量の減少を表す資料
「日本の漁業の現状について調べてみよう。」◎水産業に携わる人々の工夫や努力を調べる。
まずは漁師さんたちはどうやって獲るのかな？調べてみよう？
「マグロは釣るんじゃないかな。」
「罠をしかけたりするよ。」
「養殖ってスーパーで書いていたよ。」
「みんなの手元に来る水産物はどこでどのようにして捕るのか調べてみよう。」
釣る方法
網で捕る方法
育てる方法
◎宮城・広島の牡蠣
寿司ネタの産地を地図で確認しよう。
「日本の周りではたくさん魚が捕れるんだね。」
◎主な生産地
（遠洋・沖合・沿岸）
◎海流
◎太陽
◎漁法
◎定置網
「取り方が違うのは？」
「小田原の漁港ではどんな取り方なのかな？」
「海外でどうやって獲っているのかな？」「だんだん魚が捕れなくなっているよ。」
「今年はイカが全然取れないんだって。」
「ウナギやマグロが捕れなくなるかもしれないよ。」
「同じ魚でも価格が違うし、取れるところも違うよ。」
「○○産とか養殖タイって見たことあるよ。」
養殖漁業について，自然を守る取組や消費者のニーズにこたえる取組について調べる。
栽培漁業について調べ，自然の仕組みを生かした漁業であることを理解する。
漁業の制限や水産資源の減少について調べ，漁業に携わる人々の悩みや願いをとらえる。
◎漁業関係者の工夫。
「おいしい水産物を獲るために、えさや環境に気をつけているんだね。」
「海とは関係ない森林の事も考えているんだね。」
養殖は自然環境を活かしているんだね。
栽培漁業は水産資源を守っているんだね。
◎産地と消費者を結ぶ輸送のはたらきについて（運輸）は次単元で扱う
「漁師さんや養殖・栽培に関わる人たちはいろいろ苦労しているんだね。」
「でもこのままで、ピンチは解決するのかな？」
「今まで調べたことから、ピンチが解決できないかな？」
「日本の漁業のピンチを救え！」
日本の漁業のピンチを救うために、あなたはどんなアイデアがありますか？（本時）
（予想される子どもの考え）
養殖・栽培漁業から見た考え
マグロ漁から見た考え
労働人口から見た考え
買う人から見た考え（消費者）
学習のまとめを行う。

６．本時について

（1）目標

今後の日本の水産業について，それぞれの漁法や栽培・養殖漁業などの価値を考慮しながら，自分の考えをまとめることができる。

主な学習活動	○主な支援・留意点　★評価（観点）
1学習問題を確認する。 **これからの日本の漁業を元気にするためには、どうすればいいと思いますか？（本時）** **栽培・養殖業によって元気になる理由** ①漁業関係者は高齢化，後継者不足だから養殖の方が働きやすい。 ②２００カイリ問題で生産力は上げられないから養殖を増やす。 ④養殖すれば自給率が上がるから。 **天然ものを捕ることをコントロールするが元気になる理由** ①天然の魚の方が新鮮で，安全だから。 ②禁漁期間など、ちゃんと魚の捕る漁を管理すれば、効率よく捕ることができるから。 **支援が元気になる理由** ①公務員のように安定した収入があればいいと思うので、国から支援をすればいい。 ②税金を投入してロボットをたくさん作り、労働力を増やす。 2発表を聞いて、自分の考えを発表する。 「自分は○○の意見が元気になりそうな気がします。理由は△△だからです」 3友達の考えを聞いて，自分の考えを書く。 4議論する。 5自分の考えをまとめる。	○児童の考えを把握し，賞賛し，認めるために，全員にノートを持たせる。目を通した後で，板書させる。 ○黒板を２つに分け，輸入に頼るべきか，生産力を上げるべきかを一目で分かるように板書させる。 〈意識させたい論点〉 ・予算・衛生，安全・環境・自給率・日本の将来など ○根拠を基に発言した児童を賞賛し，根拠として挙げた資料（グラフや表など）を全体で確認させる。 ○すべての児童が考えをもてるように，書くのが苦手な子には，板書を参考にさせる。 ○結論を先に言ってから，理由を言う型に合わせて，発表させる。 ○考えをより深めるために，友達の発表に対して，賛成や反対などの考えをノートに書かせる。一人では考えられない子もいるので，グループになって話し合ってもよいことを告げる。 ★自分の考えと友だちの考えを比べて、話し合いに参加しようとしているか。（発言・ノート）【関心意欲態度】 ★これまで調べたことをもとに、自分の考えを持つことができたか。（発言・ノート）【思考判断】

7　実践を終えて

小田原漁港に近い学区でありながら、漁業のことについてはほとんど知らない。もしくは知識として知っているが、実際は見たことがない。といった児童がほとんどだったので、教師が過去の授業研究で見た時にどの子どもも意欲的に取り組んでいた「寿司ネタを使った導入」を行った。お寿司のネタは子どもたちも身近なもので、魚の種類も豊富にある。その中に小田原名産の一つ「アジ」を含めることで、前時に行った地産地消の学習から、「どのようにアジはとれるのか」「他の魚はどのようにとるのか」という「漁法」に関する視点が出てきた。ここまでは単元計画通りだった。

そこから「漁法＝魚をとる方法」からなぜその漁法を選ぶのかというところに着目してみると、「マグロが取れなくなるかもしれない。」「最近漁獲高が例年以下ってニュースで行ってた。」というつぶやきがうまれ、「将来、魚が取れなくなるかもしれない。」という子どもたちに身近な切実な課題がうまれてきた。

学習が進むにつれ、漁法（魚を捕る）ことが「漁法の工夫」につながり、どんな魚が捕れるのか。どの地方ではどんな漁法があるのか。なぜ小田原ではアジが捕れるのか。という問題意識が出てきた。そこで資料集やHPなどで調べてみた。しかし、調べている様子から、漁業のことに身近さをあまり感じていない子どもたちに、この方法はただ知識を増やすだけで、子どもたちの中で満足感ができてしまい、切実な課題解決まで発展しな

い様子が見られた。そのため、近くにある、神奈川県水産試験場の人たちに直接行き、お話を聞くことで「漁業のプロの言葉」から生の声を通して、子どもたちに机上の論理だけでない、「現場」のことについて肌で感じる機会を設けた。定置網の模型や実物、また県にここだけしかない大型の定置網実験装置などを見て、子どもたちの目の色が変わるのを感じた。

お寿司という子どもたちの身近なものを導入にし、そこから漁法に着目したまではよかった。しかし漁の方法という身近なものから離れると、知的好奇心が薄くなる子どもが見られたのは課題である。これは漁業を扱った本単元だけではなく、社会科全体にいえることだが、子どもたちが「実際に体験できないこと」をいかに「切実感を持った課題」にすることが大事になってくる。本単元で成果としてあげられるのは「プロの声」をいかにうまく課題解決に活かしていくかということだ。子どもたちの興味関心がないときに「プロの声」を出しても意味がないし、出さないと机上の論理で終わってしまう。自分たちが調べて考察したものを「プロ」の方が評価してくれるという機会が子どもたちのひびきあいに大いに手助けとなったと思う。本単元では神奈川県水産試験場に行くタイミングが単元の流れからよかった。これは前時の単元であつかった農業の時にも農家の方からお話を聞き、バケツ稲の栽培に活かされた経験があってのことだが、研究授業だけではなく、日頃から個と全体をみとりながら体験やプロの方のお話を聞く機会を年間計画に組みこむことが必要であると、改めて感じた。